人と植物の文化史　その2

2023 夏

センノウ（仙翁）

センノウは、室町から江戸時代にかけて七夕の花として人気を博した植物である。中国大陸からの渡来種で、おそらく中国仏教に関係して日本にもたらされたのであろう。中国には２倍体が存在するが日本には３倍体しかないことからも渡来種であることが分かる。ナデシコ科のセンノウ属の代表種である。センノウ属の仲間にはフシグロセンノウやマツモトセンノウなどがあり、センノウとともに鮮やかな赤色の花が特徴的である。センノウが文献に登場するのは 15 世紀になってからで、室町時代までには渡来したと見られる。江戸時代にシーボルトとツッカリーニが著した『フローラ・ヤポニカ』に新種として初めて記載されたが、その学名は「リクニス・センノウ」、日本語の仙翁の読みがラテン語の種小名に使われたのである。リクニスとは炎のことで、切れ込みのある赤色の花を炎に見たのである。くらしの植物苑で栽培されているセンノウ（写真）は松江市近郊で宮廻夫妻によって栽培されていたものを 2000 年に株分けしてもらったもので、『フローラ・ヤポニカ』で新種として記載された植物画の形態と一致する。辛うじて遺存していたセンノウが植物苑で復活を遂げている。

センノウは８月を中心に前後３か月ほど鮮やかな赤色の花を咲かせる。室町時代から江戸時代にかけて京都を中心に盛んに栽培され、生け花や贈答花として利用されていた。宮中では不老長生の仙花とされ、華道では七夕立花として用いられた。室町禅林では、特別な日であった七夕にセンノウを送ることが定着していた。京都では夏の３か月はセンノウの花で賑わい、七夕前後は花束を抱えた人々が行き交った。生け花作品を見せ合う「七夕花合わせ」が催され、集められた花は数千本と記録されている。宮中に献じられる様子は絵画資料から知ることができる。そこには「花扇」に７種の花が飾り付けられ、赤色のセンノウと藍色のキキョウが強調して描かれている（※）。七夕ゆえに猛暑の暑気払い以上に強い愛情が込められていたものと思われる。

センノウ

近代になるとセンノウの記録はなくなり、植物学者は日本では消滅したと考えていた。ところが 1995 年の夏、出雲市で栽培されていたことが分かり、続いて西日本各地でも確認されている。各地の植物園でも株分けや培養によって栽培が試みられており、猛暑を追い払う七夕の花センノウが復活する日も近い。

※「七夕花扇使図」として、住吉広定（奈良県立美術館蔵、江戸時代）や原在明（陽明文庫蔵）による掛幅が知られている。

⇦洛中洛外図屏風（甲本）
左隻第二、三扇中段部分

歴博では 16 世紀や江戸時代の京都の様子を描いた「洛中洛外図屏風」を複数所蔵しています。どこかにセンノウも描かれているかもしれません。

館蔵の屏風はホームページ内の WEB ギャラリーでご覧いただけます。

7月　ドクダミ科

ハンゲショウ は一般には半夏生と書かれるが、半化粧と書かれたりもする。夏至から 11 日目の半夏生のころに花序に近い上部の葉二、三枚が白くなるので半夏生と呼ばれるようになったとの説がある。しかし、かたしろぐさ、みつじろぐさ、おしろいかけといった各地の俗称からすると、やはり白粉で化粧したという意味の半化粧のほうが説得性はある。半化粧までに田植えを終えるようにとかつては言われたという。同じような植物にサトイモ科のカラスビシャクがあり、こちらは半夏と書かれる。どちらも農事にかかわってきたのではないだろうか。

ハンゲショウは湿地や池沼の縁辺に直立して群生し、高さが 1 メートルにも達する多年生の草本である。太くて長い地下茎にしっかり支えられている。ハンゲショウはドクダミ科に属しており、ドクダミとは近縁である。いずれも茎や葉に独特の臭気があり、胃腸病などの治療に民間薬として古くから用いられてきた。花も尾っぽに似た総状花序を出し、多数の小さな白色の花をつける。おもしろいことにドクダミ属は世界にドクダミ 1 種のみ、東アジアにしか分布しないが、ハンゲショウ属は世界に 2 種、北米とアジアにそれぞれ 1 種が分布し、そのうちのハンゲショウは東アジアから東南アジアにしか分布しない。日本は、梅雨を彩る植物としてドクダミもハンゲショウも見ることができる世界でも類まれな地域なのである。

ハンゲショウ

ドクダミ

ドクダミ（八重）
俗称：ヤエノドクダミ

ドクダミの花びらのようにみえる白い部分は総苞（そうほう）と呼ばれる葉が変形したもの。ハンゲショウと同じ仲間というのがよくわかる。

9月

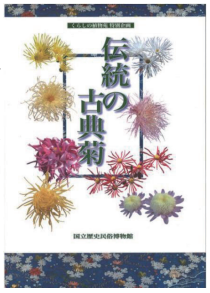
キク（9 月～ 11 月）

キクという植物名はキク属すべてを含む総称である。キクはおよそ 1,500 年前、中国においてチョウセンノギクとハイシマカンギクが交雑してできた雑種が起源と考えられている。キクは日本を代表する花とされるが、実は本場は中国にあり、日本には奈良時代に観賞用、薬用としてもたらされた。中世、近世以降も幾度となく渡来が繰り返され、また日本では独自の改良がさかんになされたことで、花形や花の色などが多様化し、たくさんの品種群が生み出されてきた。中国では、キクの花から滴る露が不老長生の霊薬とされ、日本に渡来してからも不老長生を願う菊水伝説や重陽の節句(旧暦9月9日)での菊酒の風習が伝えられてきた。

キクの花は多数の小さな花が集まり一つの頭花（頭状花）となっている。ふつう外側に舌状花が配列し、内側に背丈の低い筒状花が密集するが、近世になると日本独自の変化がもたらされ、垂れ咲が特徴の伊勢菊、花弁が針のように細く直立する嵯峨菊、開花してから花弁が狂うといわれる江戸菊などが作出された。今日では花型が大きな大輪が作出され、各地で菊花展が催されるようになっている。

毎年 11 月に特別企画「伝統の古典菊」を開催しています。

図録（2015 年刊行）⇨
ミュージアムショップにて販売中



歴博ホームページでは、毎月みごろの花を紹介しています。
トップ＞展示＞くらしの植物苑＞今週のみごろ

7月

ベニバナ

ベニバナの花

⇧本館第3室
「最上川舟運と紅花」の展示があります。
ベニバナの歴史的な利用をみてみませんか。

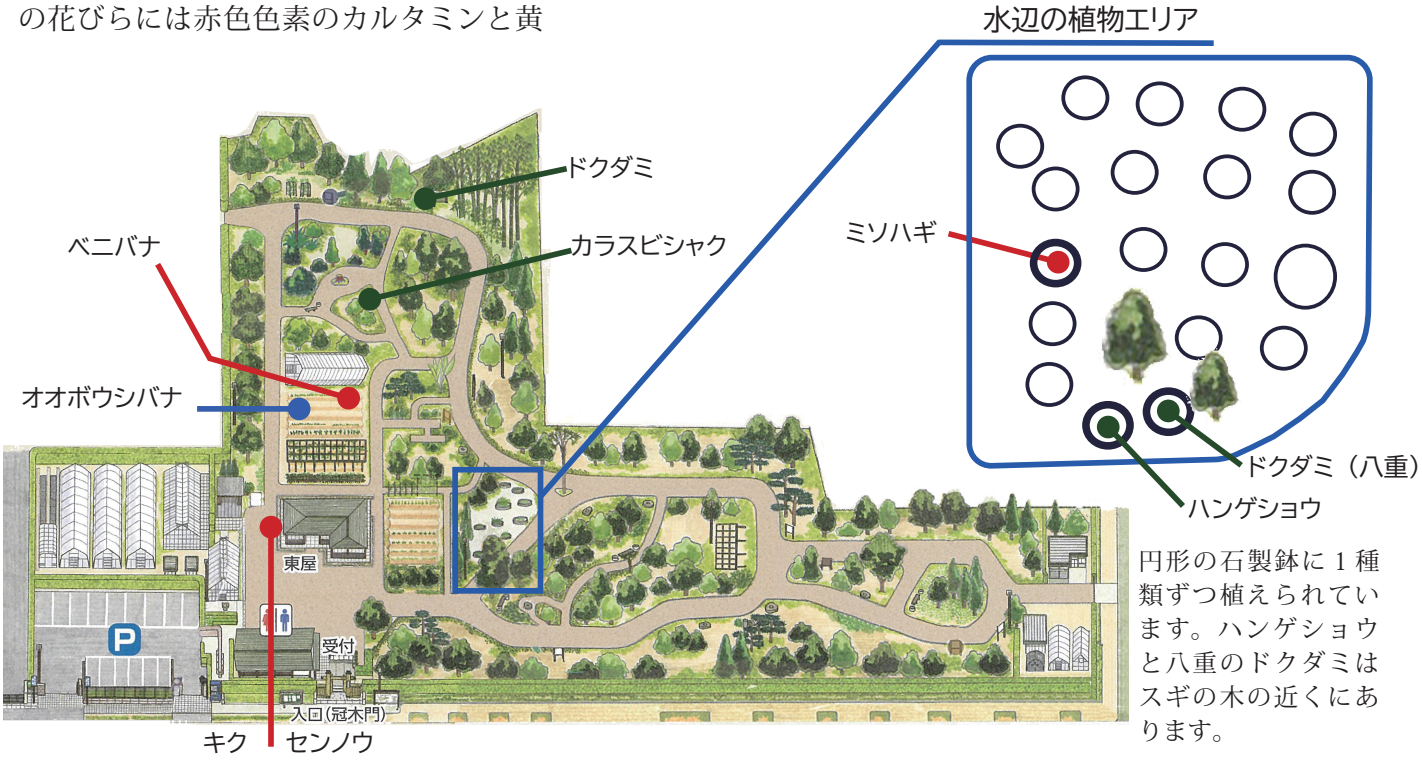
法隆寺内にある藤ノ木古墳の石棺内から鮮やかな紅色を呈する大量のベニバナ花粉が検出され、南西アジア原産のベニバナが古墳時代後期に日本にもたらされていたことが明らかになったのは 1989 年のことであった。

南ヨーロッパから西アジアでは紀元前 20 世紀頃から栽培されていたが、日本にはシルクロードを経て中国にもたらされた栽培植物の 1 品種が渡来したと考えられる。古代日本でベニバナのことをクレノアイ（呉の藍）あるいはクレナイ（呉藍、紅）と呼んだのは、呉の国からもたらされたからである。古代ではスエツムハナ（末摘花）とも呼ばれた。

ベニバナの花形や葉形はアザミの仲間によく似ており、ベニバナ属はアザミ属にもっとも近い。ベニバナ属は世界に約 20 種が知られるが、そのうちベニバナ 1 種が栽培・観賞植物であり、多数の品種群の総称である。開花早々の花は黄色であるが、次第に赤色に変わる。ベニバナの花びらには赤色色素のカルタミンと黄色色素のサフロールイエローが含まれるが、水溶性の黄色色素は除去され、赤色色素が紅色の染料として抽出される。

奈良・平安時代では中国地方から関東平野にかけて広く栽培された。宮中の御服や調度品の紅染法が規定され、貢納が命じられていたことが延喜式に記されている。ベニバナの主たる用途は化粧料や染料であったが、トイレから大量のベニバナ花粉が検出されていることから薬用でもあったと考えられている。

中世末から江戸時代にかけて、山形県の最上地方が一大生産地となった。この地方の気象条件がベニバナの生育にとくに適していたことと、最上川河口にある酒田港が需要地京都と深く結びついていたからである。紅や紅色染料は高額で取引されたため、江戸を取り巻く地域でも栽培が盛んであった。明治期になると、化学染料の輸入によって日本でのベニバナ生産は一気に衰退した。



円形の石製鉢に 1 種類ずつ植えられています。ハンゲショウと八重のドクダミはスギの木の近くにあります。

東屋の周囲に鉢植えで置かれています。

8月

ミソハギ（8月～9月）

ミソハギはミソハギ科を代表する植物で、盆花としてよく知られている。日本全土に分布することもあって、ミソハギを盆花とする地域はとても広い。耕地整理が大々的に進められる中で、溝や水溜あたりにごく普通に見られたミソハギの群落は急速に失われていった。それでもお盆になるとミソハギの切り花を買い求めて仏壇やお墓にお供えするところもまだ残っている。

ミソハギの花

ミソハギが盆花になったのはどうしてであろうか。それは水辺に群生することと、お盆のころがちょうど花盛りであることによるのではないか。盆に戻ってきた精霊に水でみそぎをさせるという説が有力だ。ミソハギという名は、水ハギ、みそぎハギが語源ではないかとも言われる。かつては近くの水辺にごくふつうに見られたミソハギは、水とみそぎに必然的に結びついたのかもしれない。

日本にはミソハギと近縁のエゾミソハギが分布する。エゾミソハギは日本だけでなく、アジア、ヨーロッパ、北アフリカに広く分布する。ミソハギは盆花として供えられてきたが、エゾミソハギは全草を下痢止めや潰瘍の治療に用いられる。どちらも人々の生活に深くかかわってきたのである。

8月

ツユクサ は路傍や荒れ地にふつうに見られる1年生の草本である。梅雨期から初秋にかけて鮮やかな青色の花を咲かせ、花を抱く苞葉が二つに折りたたまれてぴったりくっついており、花の色・形に引かれる人は多い。若芽は食用にされ、漢方では全草を解熱、解毒、利尿などに用いられる。斑入りの園芸品種も作出され、観賞用にも栽培される。

オオボウシバナ

くらしの植物苑にはツユクサの変種であるオオボウシバナが栽培されており、7月から8月にかけて鮮やかな青色の大きな花を咲かせている。オオボウシバナは牧野富太郎が命名した新変種名である。ツユクサの花びらにはコンメリニンという青色の色素が含まれる。この色素は、布の染色や多色摺木版画である錦絵の絵具として使われた他、友禅染の下絵用絵具として長らく使われてきた。近江国栗太郡山田村、現在の滋賀県草津市では遅くとも江戸初期に花びらがツユクサより数倍も大きいオオボウシバナが栽培され、昭和30年代まで受け継がれてきた。花のしぼり汁を沁み込ませた青紙は、京都に近い草津の特産品であった。

⇧本館第4展示室
東日本大震災で被災した気仙沼の民家（尾形家住宅）を一部移築復元しています。お盆の時期は盆飾りをしています。（写真は通常時）

⇧東海道名所図会（本館蔵）「草津」に描かれた青花紙製造の図

国立歴史民俗博物館
National Museum of Japanese History
2023年7月1日発行
文・写真：辻誠一郎（東京大学名誉教授）　編集：島津美子（本館研究部）